

ナンバーワンの教場づくりを！

会長 鈴木 精成

「詩吟を勉強し始めてから、月日の経つのが早く感じています」との言葉をよく耳にしています。正に「キョウヨウ、キョウイク」（今日用がある。今日行くところがある）の日々がそうした感を醸してくれるのでしょう。その駆け足の今年も、四月十九日の「昇伝審査会」を、まず盛会裏に終えました。

今年の昇伝審査を申し込んだ方は二一九名で、昨年の一九一名に比べ二八名も増加し大変な活気でした。その内、初めて受審された方が四六名おられ、緊張の中にも伸び伸びと平素の研修の成果を発表していた様子は本当に嬉しい場面でした。今年も、審査を渡精華、佐藤精堂、長谷川精研の三先生にお願いしましたが、やはりハードスケジュールであり、三先生には大変なご苦労をいただいたこと、心から感謝申し上げます。当日の先生方のご指導は、受審の皆さんのこれからの精進のために、大きな糧となることと思います。十分に生かしてください。

来る六月廿一日（日）には「全国吟道大会」が開催され、「千代田」の吟友が大挙参加を予定しています。今年には「家元 横山岳精吟道八〇周年、宗家 横山精真就任一〇周年」の記念大会であり、盛大な催しになります。記念の大会に参加できる喜びをもって、揃って参加しましょう。

私どもの平素の吟の精進の原点が「教場」にあることは申すまでもありませんが、その「教場」のあり様につき、思うところを認めさせていただきます。

「教場」は吟友が定例日に集い、楽しい交流の機会をつくる場であることは勿論ですが、その場

で いざ研修！ となったら、全員が真摯に吟の勉強に向う場としたいと思います。そのためには、次のような「構え」が必要です。

一、「教場」は定時にスタート、定時に終了

二、「吟礼」の一声で元気な「宗家信条」の唱和

「岳精会詩」の合吟

三、「教場」研修中は、私語、私的動きを慎む

四、指導者の的確な指導によるお互いの吟力向上

「教場」には、常に新しい方を迎える雰囲気が必要です。馴れ親しんできた吟友以外に「教場」にフレッシュメンバーを迎えたとき、その方々の第一印象（「ピリツ」として明るい）などを大切にしたいものです。

「千代田」の誇りは、多くの吟友との出会いの機会があることと共に、はじめある「教場運営」が行われることにあると思います。お互いの協力です。

「岳精流一の「教場」」造りを目指しましょう。

十一月十五日・十六日（日・月）には、会を挙げてのひさしぶりの「吟行会」を、下田方面一泊旅行として計画が進められております。今年のメインイベントとしての企画です。多くの吟友にとって楽しいひとときが過ごせたらと思います。多数の参加を期待しています。

昨年急な病に見舞われたKさんが、懸命なりハビリの結果元気になられ、過日「江南の春」杜牧作を見事に吟じられ「イヤー詩吟のお蔭だよ」と言われた一言が心に残ります。「元気だね」「吟が上手くなったね」というような言葉の力が、人が支えるのだと、何かの本で語られていたの

岳精流日本吟院

ちよあ

第 5 1 号

平成 2 7 年 5 月
千代田岳精会弘報

平成廿七年岳精流指楯

日に新たに



を思い出しました。

春の昇伝審査会

受審者二一四名と最多を記録

昨年十一月に初めて宗家の公開講座を開催な
ど吟友の輪拡大に努めた成果で、受審申込者が二
一〇名を超える過去最多となりました。平成廿四
年に一五〇名を超えて、三年で大台に乗せたこと
になります。

あいにくの小雨のぱらつく四月十九日、東郷神
社水交会に渡精華 指導本部長、佐藤精堂 副幹事
長、長谷川精研 寿栄・幼少年部長の三名の審査
の先生をお迎えして開催されました。

受審者の皆さんは眼前の庭園の池に映える萌
え立つ若葉を愛でることなく審査に集中、普段の
実力を発揮され、講評でも先生方から「基礎が確
りした人が多かった」との評価を頂きました。

中伝昇伝者

丸二支部	川口 童山
同	森田 準山
日暮里	柿山 理山
同	三須 香山
東陽町支部	鵜飼 輝山
神楽坂	中山 靖山
ハザマ支部	滝澤 春山
同	日吉 鳳山
同	清水 清山

初伝昇伝者

生田	井田 舜山
新宿	濱口 頭山
丸二支部	長谷場純泉
同	近藤 美泉
同	笠 泰泉
日暮里	吉田 紀泉
鎌倉	酒井 英泉
同	鈴木 諭泉
桜ヶ丘	福井 澄泉
同	木下 正泉
同	中島 義泉
同	久保 洞泉
神楽坂	奥野 陽泉
調布	渡邊 慎泉
熊谷	折川 華泉
同	大藤 征泉
同	山上 香泉
同	和栗 美泉
同	堀田 宣泉
清水	湯浅 和泉
中野	森坂 雄泉
同	神谷 知泉
逗葉	竹下 尽泉
用賀	宮永 明泉
ハザマ支部	三島 寿泉
同	遠藤 土泉
新宿	半村 晃泉
同	矢野 隆泉
同	小林 晴川
東陽町支部	

中級昇伝者

詩情を表現できる吟をめざして

用賀教場長 竹下 尽泉

この度、岳精流詩吟の雅号「尽泉」を拝受いた
しました。何か人生の第二段階をスタートしたよ
うな気分です。

生来、音感が悪く声も出ず、その上緊張し易い
タイプでこれまでは吟じる度に失敗ばかりで、ご
指導して下さっている先生方には随分と心配ば
かりお掛けしてきました。

こんな状況を引きずって、練習でさえ億劫にな
っておりました頃、ある先生が見るに見かねて
”姿勢を正して、母音を吐き声で出さない”
と指導して下さいました。これが出来るよう秘か
に練習を繰り返しておりましたら、今までとは違
った発声ができそうな感触が得られました。その
後、先生から「良くなって来ている」と言われ、
さらに気持ちも前向きに転じてきました。

今では、ご指摘・ご指導を頂くことの意味・内
容が理解できるようになり、秘かに練習で試せる
ようになって来ています。

こういう状況にあることが雅号を賜るレベル
なのかなと思っております。健康に気をつけ、自
分の身体を楽器にして、詩歌の持つ詩情が表現で
きるよう「ありったけ」の努力をして参りたいと
存じます。



第三の人生―「吟」の世界 多くの先輩諸兄に囲まれて

鎌倉副教場長 鈴木 諭泉

昭和三十三年、社会人として世に出、右肩上がりサラリーマン時代を一気に走り、バブルの終焉を迎えた平成十年定年退職を機に、自分の好きな旅行、釣り、ゴルフ等々満喫しようかと密かに思っておりました。ところが先輩から、退職して毎日が日曜日で楽しいけど、半年もすると逆に毎日が退屈でしようがないから何か仕事を見つけておいた方がいいよ、との勧めがあり、思い悩みましたがサラリーマン時代趣味としていた「蕎麦打ち」があり、家内の応援もあってこの静かな鎌倉で自分の趣味を生かした第二の人生も悪くないかもと考えるようになりました。

自分の進むべき方向が決まったことで、それからの会社の休日は江戸風俗研究家、故杉浦日向子さん著の『ソバ屋で憩う』を片手に東京中の蕎麦屋を食べ歩きました。幸いな事に鎌倉の旧住宅街に物件が手配でき、俗に言う父ちゃん母ちゃんのお店を、それも週休二日制で始めてしまいました。当時の商店会長にも、もう少し真面目に商売をやんなさいと怒られました。素人蕎麦屋は毎日が勉強の連続で、それでも二年を経過した頃からお客様も安定しマスコミ雑誌にも『手打ちそばの隠れ

宿』として取り上げられるようになりました。そんな或る日、自動車事故で利き腕の右手が使えなくなり、家業は三男坊にバトンタッチ、怪我也も落ち着き、リハビリしながら店の手伝いをしていたところ、常連の高橋さんから「詩吟の会をやっているんだが、大将はどうせ暇なんだから教室に遊びにおいでよ」と誘われ見に行ったら入会でした。

今考えると、第三の人生『詩吟』の世界に導いてくれたのが故高橋辰風 前教場長と、現犬飼堯山教場長でした。忘れもしない東日本大震災の二週間後のことでした。漢詩が、詩吟がどんなものか未だ理解しておりませんが、入会から三年を過ぎ、吟ずる楽しさが少し分かって来たところですが、吟を通して多くの人達との交流、毎回の教室が楽しみでなりません。教室の度に、上手に吟じられない悔しさは残りますが自宅に帰っての復習がこれまた楽しく、詩の内容やら、時代背景やら、中国、日本の歴史を繙いたり、また最近野沢先生のご指導でコンダクターも始め忙しい日々です。

四月から副教場長に指名され、宗家の言葉「指導とは―伝達する事、共に学ぶ事であり」を肝に銘じ、教場長を助け、組織、多くの仲間との潤滑油になればと思っております。

廿七年度昇任審査受審

桜ヶ丘 木下 正泉

岳精会会員にとり、年間最大行事は本部主催の

大会、会や教場の温習会、そして直接当事者として成長が評価される昇任審査であると言えよう。自らの成長の為、私も機会を捉え励むと共に、今一つ教場の優秀な指導陣の厳正適切、丁寧懇切な指導にお応えすべく「さすがアノ指導陣の弟子だ」と評価される機会にしたいとの思いがある。そこで自らに課したのは、吟ずる詩文を千回以上本気で練習し十分な自信を持って臨むこと。元日より始め、四月十日迄百日間、一日十回練習すれば千回となり、後十日余仕上げに尽くす。

幸い廿五年、廿六年は完遂し、余裕を持って受審。だが今年、まともな練習は所用で一月中旬から廿日余り二二〇回のみ、加えて九〇歳の身が健康を過信して体調不良を招き、肺炎を病み三月末日まで四〇日間入院。退院即施設入所で今なお治療中である。本来なら辞退すべきだが、挑戦の思いが自分の中で次第に大きくなる。幸い入会時に教場長から頂いた家元のテープに課題曲が収録されており、退院後連日三〇回練習、直前教場で披露した。息が続かないものの、大きな声を出さねば節調OKとの事で、先生や友情厚い吟友に奨められ「詩の心を吟じよう」と出席を決意した。だが当日まで、指導陣に申し訳ない結果を来してはと不安であった。この不安を一掃して頂いたのは審査員佐藤先生であった。受審者の成長の為に暖かく優しい適切なご指導をされており、お蔭で安心し、精一杯吟じられた。

かくて、二度と出来ない貴重な経験の廿七年度審査を各位にお伝え申し上げます。

「泉」を頂いて

清水 堀田 宣泉

辞書によりますと、雅号とは本名以外に付す風流な名、とあります。

「泉」という名は岳精流では、第一歩、入門編です。自分の吟が「泉」の名に相応しいか？疑問に思うこともあります。

振り返りますと、以前から詩吟を吟じたいと願っており、その旨話をしたところ、清水教場へ案内頂いた次第です。当初は「本数は？」と聞かれて全く理解出来ず、ただ教室で先輩のご指示に従うだけでした。学び始めて暫くすると、詩吟の団体の多いことに唖然としました。他団体について殆ど判りません。しかし過日コンクールに参加し、他団体の吟を聞いていて気持ち良く詩情を感じ得たのは、岳精流でした。この点において、当初から清水教場へ導いて下さった方には感謝しております。先輩の勧めもあって昨年からコンダクターを教わっております。村上顧問自ら作成頂いた教材には、ただ頭が下がります。分かり易く作成されており、顧問の労作が練習に役立っております。やはりコンダクターを習ってから岳精流の吟の構成、吟譜、アクセント等が理解でき、教場での予習、復習に役立っております。

吟の情景、歴史等を学ぶ時、記憶を蘇らせてくれます。腹式呼吸で元気になり学ぶ楽しさが増え

ております。

「泉」を頂いた今の気持ちを大切に、教場での吟のみならず、機会を求めて学んでまいります。教場の皆様、千代田岳精会の各位に感謝し「山」「風」「龍」を目指してまいります。

初伝審査に合格して

中野 湯浅 和泉

四度目の昇伝審査で「泉」号を頂きました。「名槍日本号」を緊張の中にも何とか吟じ終え、佐藤先生から味わいが感じられるとお話を頂き恐縮しつつも素直に嬉しかったです。

詩吟を始めて三年半余り、家元、宗家、諸先生方、それから少壮吟士の吟詠を聴くことで感動を新たに、日々先生方のご指導の下、予習復習(分析・コンダクター演奏での音程チェック等々)に努めてきた積りではあったが、ここ数か月、確りした声が出ない。頑張つて声を出すと特に高音がきつい。無理に出すと喉が痛い・擦れる・音程が狂う、果てはポリープが出来たのでは：(診断結果→異常なし)等々で、吟詠に自信を失い深い挫折感を味わっていた。

或る時、藁にも縋る気持ちで試行錯誤していると、偶然、突然確りした響きあると思いき声が出た(と感じた)！この感覚は何だ！忘れない内に分析！口腔の上顎後方の軟口蓋に呼吸をお腹からコントロールしながら意識的にぶつける感覚。結局のところ今までは、理屈は兎も角、喉声・

喉での怒鳴り声に過ぎなかったんだ：と改めて気持ち考えさせられた次第であった。

今後は、ご指導頂いている先生方に感謝しつつ、佐藤先生からお教え頂いた”詩吟は間合・強弱・緩急のバランスである”を肝に銘じ、今まで以上に日々精進し、右記気付きをより確かなものになら、先生方の”聴く人に感銘を与える”吟詠“をモチベーションに、日々詩吟に精進し、吟友と一緒に健康に留意しつつ楽しんで参りたいと思います。

初伝審査を受審して

中野 森坂 雄泉

四月十九日に東郷記念館で平成廿七年度の初伝審査を受審し雅号「泉」を頂き感激いたしました。平成廿三年九月に、会社の先輩に詩吟を誘われて千代田岳精会に入会してから、早や三年が過ぎました。中野教場、清水教場で、熱心にご指導頂いている村上先生、徳本先生、細川教場長そして鈴木会長はじめ先生方には心から厚くお礼申し上げます。

当日は、朝早く起きて朝食後、発声練習と初伝の指定吟題が二つあるので一吟ずつ丁寧に練習をしました。

初伝審査では、絶句や誤読をしない様に、とにかく平常心を保つ様に注意いたしました。アクセントを確りと吟ずること、口を大きく開き声を出し出すこと、吟詠の姿勢に注意して吟じたつもり

でした。吟詠後、佐藤先生から間合いを充分にとり、緩急をつけて吟ずるようご指導を頂きました。詩吟の良さは、息をお腹にため、口から吐き出す腹式呼吸が、健康増進に大変良いこと、世代を超えて詩吟の仲間が増えることなどがあります。これからも元気に声を出して、詩吟を楽しんでいきたいと思っています。

「土泉」を頂いて

新宿 遠藤 土泉

過日、昇伝試験を受け、先生方の温情で「泉」を付けることを許されました。「泉」の良き文字は自分で選んでよいと承りました。

先輩方に聞くと、ご自分の姓名に因んだ字を使われた方が多いようで、私も試してみました。私の名前は遠藤晶土と言います。俳号は名前をひっくり返して水晶には及ばないが「土晶」を愛用しています。

さて、雅号、各文字を「泉」と組み合わせると「遠泉」「藤泉」「晶泉」「土泉」となりますが、さて、声に出して読むと最初の三文字は「エンセン」「トウセン」「ショウセン」となりどうも良い連想が得られません。最後の「ドセン」は意味がサッパリ解らないだけに深い意味がありそうで、これに決めました。

ついでに私の名前「晶土」は「マサクニ」と読みます。誰も正確に読めません。「土」を「クニ」と読む例は私が知る限り、2司馬遼太郎先生がロシ

アを論じた著作の一文「異つ土の人々」の土にクニとルビをふつておられた一件だけです。

ところで、これから吟の修練を続け数年後、或いは十数年後、更に段位が上がって「山」を頂いた時「土山」はいささか雅趣に欠ける感があり、土は変えたいなと考えております。

但し、それから又数十年後、又段位が上がって「風」を頂いた時「土風」は何と素晴らしい雅号ではないですか。「土風」の名を頂く日を夢見て、この夢を大切にしていきたいと思っております。今後も宜しくご指導をお願い致します。

初伝審査に臨んで

新宿 半村 晃泉

この度の、初伝審査に臨む気持ちは内心穏やかではなかった。と言うのも教場長の熱心なご指導及び先輩方等のご支援がありながらも、日頃の不勉強がたたり、詩吟を吟じる心得が足りず吟者としての体裁が無かったからである。

審査会では「青門の柳」を吟じたが、吟じる上でこれだけはと考えたことは、教場長からの助言・指導を忘れずに丁寧吟じることが大切と思ひ、実践すべく審査員の前で堂々？と吟じたところ評価は悪くなく安心した次第である。

さて、入会当時から目立った上達もなく恥ずかしい所存ではあるが、初伝審査に合格したということでも名前にも「泉」が付くことになりましたが、約四年の間詩吟を勉強した成果と思ひ有難く頂

戴しました。

僕の昇伝審査

新宿 矢野 隆泉

いつもは野鳥や蝉の声で賑わう東郷神社境内も、この日ばかりは辺り一帯が吟声で覆われる。そう！今日は待望の？昇伝審査だ。

今年初伝ということで例年とは一味違う、審査直前に課題の吟名が決定されるからだ。たかが二者択一にしてもいやが上にも緊張感が高まる。そこで色々な場合を想定し作戦を立てた。

詳細は既に忘却の彼方となったが、ただ、今言えることは最も予想確率の低かった課題吟の選択権が、意外にも自分に与えられたということだった。

僕は動揺した。持ち前の単純さというより愚鈍さに亀裂が走った。素直に淡々と吟題を唱えることに躊躇し、愚かにも二者択一の理由を述べる羽目に自らを追い込んでしまった。

「得意」と「不得意」といった表現では不遜の誹りを免れないだろう。そこで咄嗟に発したのが「苦手な方の吟を…」という断末魔の台詞だった。審査の先生方も仕方なく苦笑された。自分の背後からは失笑の聲が聞こえてくるような気がした。ただ、いつもご指導を頂いている新宿教場のお師匠さん達の優しい笑顔を目にしたとき、僕は少し落ち着きを取り戻した。そして精一杯「青門の柳」を吟じた。

新宿教場の仲間たちも、無事昇伝審査を終え、それぞれが安堵の表情を浮かべていた。それから互いの健闘を称えるため、皆揃って駅前前の宴会場へ向かった。境内の木々も夕陽に映えて美しく、優しく祝福しているように見えた。こうして、例年とは一味違った僕の今年の昇伝審査は終わりを告げた。



中伝の短歌、奥伝の俳句は自由選題とし、教本の中から選ぶ。

吟剣詩舞道連盟コンクール

今年も入賞者多数

今年の吟詠コンクール区予選は二月廿二日(日)に港・品川両区で開催され、新会員の増加の勢いを反映して港区七五名、品川区四四名、合計一九九名が挑戦し、次の四一名の方々が入賞の榮譽を手に入れました。上位入賞者は五月の東京都大会に駒を進め、更に東日本大会を目指しました。結果は後記の通り大健闘でした。入賞の皆さん、おめでとうございました。

(港区)

少年の部

優勝 小林 晴川(東陽町)

一般二部

二位 片山 寿風(東陽町)

四位 田村 菊山(調布)

五位 大木 博(神楽坂)

九位 石母田敏江(丸二)

十位 脇阪 守(東陽町)

十一位 小浦場 博(ハザマ)

入賞 下條 信行(丸二)

同 関根 紀雄(生田)

同 和田 博之(新陵)

一般三部

二位 宮野 幸泉(東陽町)

七位 澁谷 辰風(東陽町)

九位 中内 博山(ハザマ)

十位 長谷場純泉(丸二)

(品川区)

一般一部

四位 石井 浩(新宿)

一般二部

三位 中野 陽山(新宿)

十二位 波治 舞山(新宿二)

十四位 松本 清徳(神田)

一般三部

優勝 橋本 淳風(新宿)

二位 加藤 有風(新宿)

三位 宮川 丞山(神田)

五位 菅原 龍琴(丸清)

六位 粕川 紘風(神田)

七位 岡部 禎山(新宿二)

八位 宇田川静泉(新宿)

十位 森山 仙山(丸清)

十二位 池田 康風(神田)

十三位 平井 茂行(神田)

十五位 小林 公山(志茂)

優秀賞 竹下 尽泉(用賀)

同 入住 章山(新宿二)

同 濱口 顕泉(新宿二)

同 出水田鶴山(新宿二)

(東京都大会)

十一位 鎌田 国雄(丸二)

一二位 田尻 映山(丸二)

一五位 萩原 晴風(ハザマ)

入賞 細川 修泉(中野)

同 浪久 昌夫(神楽坂)

同 浪久 雅子(神楽坂)

同 江崎 亮泉(神楽坂)

同 望月 輝山(清水)

少年の部 奨励努力賞 小林 晴川（東陽町）
一般二部 同 片山 寿風（東陽町）
一般三部 十位 中内 博山（ハザマ）

奨励努力賞 橋本 淳風（新宿）
同 加藤 有風（新宿）
同 宇田川 静泉（新宿）
同 平井 茂行（神田）

中内博山氏は、七月開催の東日本大会に昨年に続いて出場します。

吟の道

中野教場長 細川 修泉

平成廿七年二月の港区吟剣詩舞道連盟主催の第三十七回吟詠コンクールにおいて初入賞出来ましたこと、誠に恐縮しております。

思えば、平成廿二年の春に、元上司の村上龍道先生から勧められて清水教場に入会させて頂きました。それから五年の歳月が過ぎました。その間、各種の研修会では、下手な私の吟詠を、先生方から辛抱強く、厳しく（時には誉められ）教えて頂きました。

今度、入賞できましたのも、宗家、鈴木会長はじめ、磯田先生、岩崎先生、村上先生、徳本先生及び諸先輩のご指導と吟友のご支援の賜物と感謝しております。

今後は、先生方のご指導とご鞭撻の下に、私自身も岳精流基本吟譜の数々と、吟詠の発声・発音、

腹式呼吸、膈下丹田、大息、等々の吟詠の基本をもっと勉強・習得したいと思っております。

遙かに遠い「吟の道」を吟友の皆さんと共に活気溢れる「楽しい教場」をつくり「吟力の向上」を目指して精進していきたいと思っております。

吟詠コンクールに夫婦で参加して

神楽坂 波久 昌夫

神楽坂教場に入会して一年三か月ばかりで港区吟詠コンクールに出ることになりました。会場の港区民センターは昨年十月に初めて、尺八の伴奏で吟ずる事を経験させて頂いた場所です。

一般三部の吟が始まり皆さんの吟を聞いてとてもレベルの高さを感じ、ただ自分の今持っている力を十分出せれば良いと考え普段より力むことなく冷静に吟ずる事が出来ました。控室で係の人達が出吟者の心をリラックスするよう言葉を掛けてくれたり、経験談を話して気を遣って頂きました。

耳塚昇風先生には忙しい中、特訓を三日間もご指導頂き、吟ずるだけでなく態度、姿勢なども教えて下さった。また勝村教場長には腕を怪我しているにも拘わらず大会前日まで指導頂いた事が良い結果に繋がったと思います。

今回のコンクールは夫婦で参加しましたが、運よく二人とも入賞出来たのもお二人の協力があったことと思ひ、大変感謝をしております。

初めての吟詠コンクール

神楽坂 波久 雅子

詩吟に入会して一年が過ぎようとしている時、コンクールに出場してみませんかというお話を頂いた。今までに二、三回吟ずる機会を頂いたが、今回は少し違つて心に響いた。コンクールに出ること自体、まだ全然自分の胸中には無い事である。迷つた。だが神楽坂教場の人達（同期も含めて）九名も出場“という心強さに背中を押され、出る事に決めた。耳塚昇風先生、勝村教場長を交えての何回もの練習、舞台への入場の仕方、姿勢、眼の位置、本当に良くご指導いただきました。また舞台係の方々のマイクの使い方や、リラックスさせようとして下さるお心遣いには本当にお礼を申し上げたい。先生を始め多くの方々に支えられての賞であったとつくづく思い、感謝の気持ち一杯です。有難うございました。

吟詠コンクールに参加して

丸の内第二 長谷場 純泉

雨の二月廿二日、第三十七回港区吟詠コンクールに参加した。三回目の出場であった。出場を決めてから、蒐場先輩に工面して頂いたCDの伴奏を背に、強調語やワタリ、息継ぎなど、これまでもにご指導頂いた事柄を念頭に置きながら、自分なりの練習を重ねた。でも心のどこかには、自分の上がり性の克服や度胸試しを優先させる、いわば五輪精神の甘えがあった。

会場では、出場者の上手な吟が続くにつれて、徐々に胸のドキドキ感が増していった。愈々自分

吟詠コンクールに参加して

東陽町 脇阪 守

の出番となった。前回図らずも誤読という苦い経験をしたこともあり、吟譜片を手にマイクの前に進んだ。そして何とか吟じ終えた。可もなし不可もなしに思えたが、吟の出来栄えよりも、無事吟じ終えたことに安堵した。

百名を超える出場者の吟詠が終わり、成績発表となった。淡々と入賞者名が読み上げられる中で、全く思いがけなくも自分の名前を聴いた。何と十位での入賞だという。何かの間違いではと思う半面、真に嬉しい驚きであった。このような面映ゆくもまた生涯忘れられない感激を体験させて頂けたのは、岩崎先生、山口教場長などのお心籠れるご指導の賜物であり、また丸二や鎌倉の吟友の皆様の温かいご支援のお蔭と、心から感謝を申し上げます。

次は五月の都大会という。二匹目の土鱈は期待薄であるが、せめて皆様の失笑を買わぬよう、出来る限りの力を尽くして臨みたいと思う。これからも、どうぞ宜しくお願い申し上げます。

緊張を解く

神楽坂 大木 博

磯田先生から、良いことを教えて頂きました。順番が近くなったら、もう他人の吟は聞かないで自分の吟に集中。柔軟体操をして体をほぐす。

最後に自分の頬をパチンと叩いて気合いを入れる。効果は抜群でした。有難うございました。

吟詠コンクールに参加して

東陽町 脇阪 守

私は三年前の七月、鈴木会長と宮野副教場長から「詩吟をやらないか」とお誘い戴き、東陽町教場に通いはじめました。今年はこの節目と考え、思い切つて吟詠コンクールに参加してみることになりました。

私の選んだ吟題は「山中問答」でした。一つの「詩」を繰り返して吟じ、何度も先生に特訓戴くと、同じ吟題でコンクールに出場される皆様の「吟」を拝聴することなどを通じて、自身の声や節調を「自己点検」する良い機会となったと思います。

コンクール当日は、予想していた以上に緊張しました。出場者が指定吟題を各人各様の表現で「作品」として発表される中、自分の出番を待つ心境は複雑でした。そして、無事に本番が終了したときは兔も角ホツとしました。

思いがけず私は一般二部で十位となりました。正直なところまだ実感が湧きませんが、大変名誉なことと存じております。まだまだ未熟で迫力不足の吟ではありますが、今後先生方のご指導のもと「真善美」の精神を大切に、一歩前進を目指し勉強したいと考えております。

初入賞の感想

生田 関根 紀雄

昨年三月に千代田岳精会に入会し、コンクールで入賞することができたのは、偏に鈴木会長をはじめ、先生、教場長、先輩、皆様方の日頃の暖か

いご指導の賜物だと感謝しております。有難うございました。

コンクールの練習を本格的に始めたのは今年一月からでした。教場で先生方に注意された所を家に帰り練習するのですが、大きな声を出す場所がなく、車の中で主に行いました。

いつもの勉強の時はコンダクターの音を頼りに吟じていましたが、コンクールではCDの伴奏で行うため、練習するに従い、音の高低が分からなくなっていました。

コンクール当日は、教場長にコンダクターで発声練習、音合わせをやっていたきました。本番では誤読、絶句を防ぐため詩文を持ち不安と緊張を感じながら臨みました。

大会に出場して、見たこと、聴いたこと、感じたことが貴重な体験として今後の練習に役立てたいと思っております。今後も皆様方のご指導よろしくお願い申し上げます。

吟詠コンクールに初入賞

丸の内第二 田尻 映山

吟剣詩舞道連盟吟詠コンクールに入賞させていただきました。日々ご指導頂いている岩崎先生、山口教場長、見守つて下さった吟友の皆様に感謝申し上げます。

こんなに長く続くと思っていなかった吟との出逢いは、田中龍薫さんからの誘いでした。大声を出せる気持ちよさから全く縁のなかった漢詩に出逢い、歴史のこと、人物のこと、生活のこ

と、天地のこと、感じる事などなど。学びたい気持ちが生まれ、昨年「山」を戴きました。宗家の一般研修にも出席し吟道について熱く語られる話題にも心惹かれ、一生懸命の吟友の方々にも感謝、家庭の中だけだった私にとって吟を学べた事は、宇宙に飛び出したロケットの様です。日本語の美しき発音、発声の難しさ、情感の繊細さに魅了され、実現できたら嬉しいなと思います。素晴らしいこの精神を孫達にも伝えていきたい、そんな思いで今回のコンクールにも挑戦してみました。二回目の挑戦ではありましたが心境の変化が助けてくれたと考えます。

絵を描く様に、リズムに乗って、心から練れた吟が夢です。駆け足でなく、ゆっくり味わい学んで行こうと思います。沢山の熱い吟友の方々に逢える楽しみが宝です。

今後とも宜しくお願い申し上げます。

港区吟詠コンクール初出場

丸の内第二 石母田 敏江

日本と中国の歴史に魅せられて、平成廿五年六月に入会させて頂きました。最初は、皆様の前で大声を張り上げる事には抵抗を感じ、声を出すのに三か月もかかりました。

一年半を経て、ようやく人前で吟じられる様になった頃「コンクールに出場！」の話があり、感しながらも「挑戦」してみようと思いました。

当日は、一三〇名もの大勢の出場に圧倒され、張り詰めた空気と緊張感で一杯でした。落着いて

吟じられる事と制限時間を心がけましたが、頭の中は真白になり、記憶がありません。結果は思いがけず「入賞！」。驚きと喜びでいっぱいでした。

この入賞は、私一人のものではなく、これまでに沢山の吟をご指導頂いた、岩崎先生、山口先生、諸先輩の方々の賜物だと思っております。心から感謝申し上げます。本当に有難うございました。

初入賞出来ました

神楽坂 江崎 亮泉

二月廿二日に開催されました港区連の吟剣詩舞道吟詠コンクールに、幸運にも入賞出来まして大変嬉しく思っております。

コンクールには今まで四回ほど参加しましたが、一回目、二回目ときは、舞台上上がりますと足元がブルブル震えまして満足に吟じることが出来ませんでした。三回目頃から震えも収まり観客席を見る余裕も出てきて、大分落ち着けるようになりました。

四回目には指導の先生から「ゆったりと吟じるように」とのコメントがあり、意識してゆっくりに試みしましたところ、時間オーバーの失格となりました。

今回は二分以内に終わられるように時計を見ながらの練習の甲斐があり、失格をクリアのうえ入賞の誉まで頂き大感激でした。吟題は杜甫の「絶句」でしたが、指導して下さった耳塚昇風先生から「難しい吟を選んだね」と言われたときは落ち込みました。しかし先生の度重なるご指導を

頂き、どうにか様になる状態まで仕上げさせて頂き、大変有難く感謝いたしております。これからもコンクールには出来るだけ参加しまして、腕試しをしたいと思っております。

吟詠コンクール初出場の感想

新陵 和田 博之

一昨年十月の入会来、初めて吟詠コンクールに出場いたしました。順番が近づき緊張して来ましたが、取り敢えず自分の身の程は柵にあげ、前にいる人達は大根か人参だと思えば何とかなるだろうと腹を括って臨みました。いざマイクの高さを確認し（落ち着いていますね）吟じ始めると、自然に？吟譜を持つ手は震え、膝のガクガクがどうにも止まりません。頭では緊張を誤魔化したつもりでも体は正直でした。

成績発表になって、どんな人が入賞されるんだろう？と皆目見当がつかず一般二部で、発表が終わりと思った時、あれ？自分の名前が呼ばれたと思いました。事情が呑み込めず、賞状を手渡されたとき自分の名前がどこに書いてあるかわかりませんでした。

普段の教場では素晴らしい先生方と多くの先輩・僅かな後輩に恵まれて楽しく、時には苦しく真摯に学べる時間を過ごすことができ感謝しております。吟で出会う詩から天・地・人の幾多の様相を感じ、また多くの方とのご縁を不思議に思う事が多くなってきました。



全国吟剣詩舞道大会

武道館合吟コンクール

来年創立三十年を迎える「千代田」では、男子が十一月八日に開催の第四十七回全国吟剣詩舞道大会合吟コンクールに「彦山」広瀬淡窓作で挑戦することとなり、精鋭を選びすぐって六月四日スタートで第一・第三木曜日十七時から一〇回の岩崎先生の指導による猛特訓に入ります。

これまで三度挑戦し平成十八年の第三十九回大会の二十二位が唯一の入賞ですが、今回はメダルを目指しての挑戦に各教場から次の四十一名が推薦されました。

山口隆風、八田仁風、菟場一山、小山洋泉、長谷場純泉、笠 泰泉、中島義泉、鎌田国雄（丸二）
 権藤紘一（日暮里） 犬飼堯山（鎌倉） 森山仙山（清流） 菊池駿風、前田道風、宮野幸泉、伊藤正雄（東陽町） 勝村忠山、橋本隆山（神楽坂）
 渡邊慎泉、塩月崇史（調布） 徳本順風、堀田宣泉（清水） 細川修泉、小蔦正泉、桜田謙泉、湯浅和泉（中野） 粕川紘風、平井茂行、松本清徳（神田） 植村太風（鎌ヶ谷） 萩原晴風、中内博山、松尾宝山、井田舜山、二反田奉泉、三島寿泉（ハザマ） 酒井帆風、奈良崎應山、坂口鎮穂、

石井浩（新宿） 濱口頭山（新宿二）

三十周年記念吟道大会

会場・日程が決まり準備委員会発足

来年の創立三十周年に向けて、記念大会の会場・日程が決まりました。

会場 浅草ビューホテル4階 大ホール

懇親会・同ホテル3階

日程 平成廿八年十一月廿日（日）

地下鉄銀座線浅草・田原町からも近い、ご年配の会員には懐かしい昔のSKD浅草国際劇場のあった所です。収容力も十分にあり、懇親会場への移動が楽と理想的な会場を徳本副会長の世話で手配出来ました。

準備委員会は、全国吟道大会終了後、業務委員会メンバーを中心に発足します。

下田吟行会を十一月に催行します

今年、毎年実施している温習会に代えて久しぶりに秋の伊豆下田へ吟行会を行います。東日本大震災で全国に自粛ムードが広がり、観光地も閑古鳥が鳴いていた四年前元気づけようと実施された城ヶ島以来となります。

内容は一泊二日で下田岳精会との研修交歓会、観光です。吟楽部門で企画を進め、手配の都合で参加希望者を集計のところ一〇〇名近い人数となり、バス二台の予定です。

三〇〇名を越えた会員相互の交流の得難い機会として大いに学び楽しみましょう。

期 日 十一月十五日・十六日（日・月）

交通手段 観光バス 新宿発着

目的地 伊豆半島 下田温泉

下田ビューホテル 宿泊

下田市柿崎六三三

詳細が決まり次第ご案内があります。



【新会員紹介】

◇丸の内第二支部教場

山崎 巖氏（十二月入会）

鎌倉の鈴木諭泉氏の誘いで宗家の公開講座に参加し、当日入会を決めた山崎巖と申します。基本の吟の極致、真善美を守り忠実に学んでいきたいと思っております。先輩の方々のご指導宜しくお願い申し上げます。

逸見 繁氏（三月入会）

平成廿七年三月、古屋利泉さんに紹介され、あれよあれよと言う間に入会の運びとなりました。今まで詩吟とは接点が無かったのですが、諸先輩の励ましに感動し、これも一つのご縁だと思いついてチャレンジしてみようと思う今日この頃です。宜しくお願いいたします。

◇丸の内第二 桜ヶ丘教場

平井 恵子さん（十二月入会）

廣田教場長との十数年振りの再会をきっかけに何も判らずに友人を誘い入会し、月に二度一緒に学べることを励みにしています。教室では親切に指導して頂いているので、少しずつですが緊張せずに声を出せるようになってきました。

玉置 ナラエさん（十二月入会）

旧友の平井さんの誘いで、桜ヶ丘の皆様のおかげですが真剣な練習を見学し、その日に入会

させて頂きました。詩吟を始める機会を戴き、心が凜とする気持ちになりました。これからどうぞよろしくお願いいたします。

◇東陽町 熊谷教場

小池 真須美さん（九月入会）

私は熊谷さくら草ライオンズクラブに所属し、慰問活動をしておりますが、その中で詩吟や剣舞等を拝見して良い趣味と感じていましたところ山上則子さんから熊谷教場へお誘いを頂きました。教場長さんの熱心なご指導や皆さんの親切な扱いを受け入会させて頂きました。この頃、独吟でも何とかついていける様な気がしております。

小島 初江さん（一月入会）

熊谷さくら草ライオンズクラブを創設来、作りあげられた小林教場長のお誘いで分室開設時に入会しましたが、家庭の事情で退会。しかし詩吟の魅力から再度お世話になることとしました。宜しくお願い致します。

松本 光子さん（一月入会）

小島初江さんの紹介で一緒に入会。カラオケが大好きで、よく催し等の舞台で美声を聞かせてくれます。立派な仲間が増えて教場も将来が楽しみです。

◇清水 中野教場

落合 正和氏（十月入会）

友人の桜田謙泉氏の紹介で入会致しました。徳本先生の丁寧なご指導のもと皆さまの暖かい歓迎に大変嬉しく思いました。また、レッス

ン終了後、居酒屋での「反省会」も楽しみです。詩吟は作者の心を吟じていると思うので、詩をよく理解して学びたいと思います。

◇ハザマ支部教場

上田 寿美江さん（十二月入会）

心肺強化の健康法として詩吟を始めましたが、思いがけず引き込まれて楽しく、時には苦しく学んでいます。人生の晩年に新しい楽しみに出会えてとても幸運です。ご指導ご支援下さる鈴木会長始め諸先生、諸先輩の皆様に、心から感謝申し上げます。

◇ハザマ支部 新陵教場

加藤 博善氏（一月入会）

本年一月に入会いたしました加藤博善と申します。入会の切っ掛けは十二月の初めに行われましたゴルフ会の帰りの電車の中で田川先輩から詩吟の良さを聞かせて頂き、お誘いを受けまして七二歳の手習いではありませんが始めようと決め、一週間後の教室から参加させて頂きました。生涯の習い事にしたいと思っております。宜しくお願い申し上げます。

滋野 輝彦氏（二月入会）

今年の一月に教場へ参加しました。教場のメンバーの中に同じクラブの先輩と後輩がおられ、お誘いを受けて二月より入会させて頂きました。まさか七十歳になり新人になるとは思いもよらない事となりました。これまでは絵画の教室に入り、油彩・水彩スケッチ等を楽しんで

おりました。詩吟は全くの素人ですが、何とかご指導を賜り楽しめればと願っております。教場の皆様から刺激を頂き、若々しく過ごしてゆきたいと存じております。

岩崎 博之氏（三月入会）

三月に入会いたしました岩崎と申します。

今年還暦を迎え、何か新しい事を始めようと思っていた矢先に大学の先輩から声をかけていただきました。稽古でお会いする先輩方とのお付き合いの拡がりも実感しており、長く続けられるよう精進してまいります。

◇新宿教場

川合 由利子さん（四月入会）

教室中に響き渡る声、声、声。凄い！すごい！素晴らしい！友達に誘われて見学に来た時、そのまゝ吸い込まれてしまいました。人前で歌うことが大の苦手、不安で一杯ですが苦手な事にチャレンジしたので頑張りたいと思っております。宜しくお願い申し上げます。

◇新宿第二教場

青山 昇平氏（十一月入会）

吟へのお誘いを受けたとき、閃いた記憶は小津安二郎映画の中での笠智衆の放吟。名画の中でさえ恐ろしく退屈だったあの代物！でも実際に出会えた吟は、泣くほど笑う酒席と、食べきれぬナポリタン。小津さん分かってないなあ。吟とは酒と涙とナポリタンですよ。

大和田 久美子さん（十二月入会）

いつもお世話になっている町田恵子さんが、

テープで何か聴いています。橋本淳風先生の吟で石川啄木作の短歌『故郷の〜』でした。「興味があつたら一度見学にいらっしやい」と誘われ見学。皆さん気さくで優しく、練習後の食事会も楽しくて入会を決心しました。

◇新宿第三教場

船場 由紀子さん（十月入会）

友人の吉田多枝子さんに「貴女、詩吟しない？」と声をかけて頂き、周囲の迷惑も考えず入会。思い起しますと、子供の頃、父が自分の部屋で私には到底理解できないような声で唸っております。本人は詩吟を楽しむのでいたのでしよう。吉田さんが吟の話をする時の弾むような声、まさに吟楽という言葉がぴったりです。歌だけは苦手と言っていたのに、旅行先でお聞きした吟の素晴らしさに感動し驚きを隠せませんでした。漢詩の良さもまだ解りませんが、人にも物にも事にも出会いを大切に、の精神だけで、沢山の恥をかいて一つずつ習得させて頂きたいと思っております。



訃報記事

◆河合 香山さん（神田教場）

平成廿六年十二月廿三日逝去されました。享年八十二歳 謹んでご冥福をお祈りいたします。

◆北尾 北山氏（鎌ヶ谷教場）

平成廿七年二月十九日逝去されました。享年八十一歳 謹んでご冥福をお祈りいたします。

編集後記

今号以降、ワープロ編集からパソコンへステップアップします。

平成十二年五月、前任の武田弘風前部門長から引き継いで十五年を越え四十六号発行してきました。私の現役時代は、まだITが業務の中で比重を高めていく時代で、部署では使いこなすことなく定年を迎える人が多く、私もその一人のモノクロ派でした。

この間に、創立廿年、廿五年の節目を迎え、教場も会員数も目覚ましく拡大を続けてきました。多機能のパソコンが使いこなせず、ワープロは発売停止の行き詰まり状態でしたが、団塊世代より上では編集をお願い出来る方が少なく、予定者のご逝去、休会と大ピンチのところ宮野幸泉氏が新陵教場の和田博之氏をご推薦下さり、今号からパソコン編集を担当します。新担当者の知識・技術に期待するところ多大です。

機器の世代交代に合わせて、内容や体裁も新しくなる時期です。会員諸兄姉の豊富な経験や知識の一端をご提案、ご意見として是非お届け下さい。

（八田）

